

成果報告書

記入日 2015 年 4 月 17 日

氏名 辻 圭秋	渡航先国名 イスラエル	所属機関 ヘブライ大学
研究テーマ： ユダヤ・スペイン語による文学伝統の文献学的研究—「メアム・ロエズ」を中心に—		
研究期間 : 2013 年 4 月 ~ 2015 年 3 月		
研究成果（概要） 複数の版による「メアム・ロエズ」の基礎研究を行い、また広く中東系ユダヤ人の文学活動に関連した研究成果を公にすることができた。		
研究成果（詳細） 注：宗教的アイデンティティ・実践に基盤を置く「ユダヤ教徒」という呼称、「民族」アイデンティティに基盤を置く「ユダヤ人」という呼称を使い分けるのは煩雑であるため、文脈に関わらず一括して「ユダヤ人」と表記する。 二年間に亘るエルサレムの留学は刺激に満ちたもので、研究の観点からのみならず、一般的な経験としても非常に有意義なものになった。報告者の狭い意味での研究テーマは上記のように文献学であるが、関心は広く「非アシュケナズィー」、すなわち日本で通常イメージされる、東西ヨーロッパに文化的・歴史的基盤をもつユダヤ人以外のユダヤ人、なかんずくイスラーム世界、とりわけオスマン帝国治下出身のユダヤ人にある。そのような関心をもつ報告者にとって、エルサレムに実際に住み、様々な背景を持つ住民と友人になり、来歴や政治・文化的イシュー等について生の声を聴くことができたのは実に得難い経験であった。以下、①広く研究に関連することで、現地に留学することで学んだこと、②実際の研究に関すること、の二点に分けて報告する。 ①現地に長期滞在して実感したのは、オーラル・コミュニケーション及び読解におけるヘブライ語の重要性である。まずオーラル・コミュニケーションに関して述べると、前提としてイスラエルでは英語の通用度は決して低くなく、英語を母語とする二重国籍のアメリカ系ユダヤ人の数も非常に多い。しかしながら大多数のイスラエル人にとって英語はやはり「外国語」であり、自分たちの考えや思いを十全に伝えるには問題がある、というイスラエル人（ユダヤ人・非ユダヤ人ともに）は若者も含め多い。なかんずく筆者が関心を持つ非ヨーロッパ系ユダヤ人の場合は、宗教的な生活を送っている者も少なくなく、そのためユダヤ教学習において優先順位の低い英語は、結果的に二の次であることも多い。		

報告者は幸い、留学を始める前のある程度以上のヘブライ語能力（会話含む）を保持しており、イスラエルへの訪問も初めてではなかったため、「現地社会」に溶け込むのにさほど時間を必要としなかった。しかしそれはヘブライ語を解するということが理由として大きかったのでは、と推測する。

また、ヘブライ語で書かれた文書は聖書のみならず。ヘブライ語の書籍や研究論文の多さ・重要性については、声を大にして訴えたい。人文・社会科学において、たとえばキリスト教研究やイスラーム研究等、重要な論文がヘブライ語で書かれている分野・テーマが多数ある（報告者の関心領域が特に該当する）。そのような二次資料にアクセスできるということの重要性は計り知れない。

もう一点イスラエルに留学することで学んだ重要なこととして、イスラエルにおける非アシュケナズィー研究の研究状況（関心・規模等）が挙げられる。現在のユダヤ研究の発端である、19世紀ドイツ発祥のユダヤ教科学（Wissenschaft des Judentums）以来ヨーロッパ以外の各地のユダヤ人コミュニティの歴史や文化、あるいは存在自体、等閑に付されることがほとんどであった。現在のイスラエルでもいまだ現役のシオニズム「正史」において、またエスニシティ問題が可視化され、多文化併存が当たり前になって久しい現在においても、大雑把に言って状況は変わっていないように感じた。それでも、たとえばアメリカや他国と比較すると、イスラエルでは各コミュニティで自分たちの過去の経験や歴史・文化を保存・研究する動きが強く、そのコミュニティ出身の地道かつ堅実な研究者が多いのが大変に嬉しかった（通常その研究はヘブライ語で書かれるので、英語しかできない場合はお手上げである）。

上記に関連して、エピソードを一つ挙げよう。日本ではあまり知られていないことであるが、第二次世界大戦中のショアー（「ホロコースト」）では、アシュケナズィー文化圏以外の無辜のユダヤ人も多数、無残に殺戮された。特に被害が甚大であったのがギリシャ（セファラディームという、スペイン系ユダヤ人の中心的な都市であるサロニカ（テッサロニキ）を擁する。サロニカはユダヤ人人口があまりにも多すぎて、街の公共の休日がキリスト教徒の日曜日ではなく、ユダヤ教徒の安息日である土曜日が採用された程であると言われる）であった。スペイン系ユダヤ人の子孫である Michael Held 氏は、イスラエルのショアー研究があまりにも「ヨーロッパ中心主義的」で、「我々セファラディーム」を無視したものである、と当時履修していた授業の担当教授を批判したが、その教授は特に考慮することもなかったと言う。それに憤慨し、ヘブライ大学で教鞭を執ることになった際、「絶対に半期は“セファラディームとショアー”というテーマで授業を行う」と決意し、現在でもそれを貫いている。全体で見ると、犠牲者 600 万人とされる中でスペイン系ユダヤ人やアラブ・アフリカ系ユダヤ人の割合は統計的に決して多くなく、そしてサロニカでは他の都市と比べてもそもそも絶滅率が高すぎて、つまり生き残りが極端に少ないために研究が遅れたという事情はあるにせよ、イスラエルにおけるエスニシティ問題の一端を垣間見た思いであった。

②実際の研究テーマに関連することとしては、まず、他では考えられないほどの豊富な一次文献資料を渉猟できたことが挙げられる。特に研究テーマである「メアム・ロエズ 創世記」（詳細は研究計画書参考のこと）の初版は 1730 年イスタンブル刊（実際には「クシュタ」と表記）であるが、エルサレムのベン・ツヴィ研究所所蔵のものは目を見張る程に保存状態が良く解読容易、撮影も快く許可して頂き、また同研究所所蔵の他の重要な版との比較も行うことができた。

また、二次資料に関しても当該分野で必須といえるヘブライ語論文を多数入手できたことは重要である。特に、Louis Landau のヘブライ大学提出の博士論文 Content and Form in the Me'am Lo'ez of Rabbi Jacob Culi (in Hebrew) を入手できたことは幸運であった。その他にも同著者によるヘブライ語論文数編をはじめ、イスラエル以外では入手しにくい、ヘブライ語で書かれた資料を多数収集することができた。

研究に関連する学びでは、ヘブライ大学の聴講生として、世界的なユダヤ・スペイン語研究者である David M. Bunis 教授や、ユダヤ・スペイン語文学が専門の Micheal Held 講師の授業を履修することができたのは大きな意味を持っている。また、エルサレム近郊のマアレー・アドゥミームにある Sefarad – El Instituto Maale-Adumim を何度も訪れ、所長の Avner Perez 博士による学問的薫陶を何度も受け、同研究所所蔵の貴重なユダヤ・スペイン語で書かれた手稿（特にドンメと言われる、「偽メシア」シャヴタイ・ツヴィと運命を共にし、ユダヤ教からイスラム教に改宗した子孫のもの）の資料や情報も頂くことができた。

さらに、留学中にユダヤ・スペイン語およびヘブライ語で伝承される多数の歌（及びウッド演奏）を、エルサレムにある The Center For Middle Eastern Music を中心にして、Ruth Yaakov, Gila Beshari 等の世界的な音楽家からの伝承を受けた。

加えて、報告者の狭義の研究テーマとしてはユダヤ・スペイン語文学なのだが、イスラエルに実際に留学してみて、ユダヤ人の文学活動がいかに過去のヘブライ語文学の伝統の上に行われてきたかを、改めて痛感した。また、スペイン系ユダヤ人だけでなく、広く中東のユダヤ人に対して関心を持っていたために関連する講義・イベント・資料収集を行ったおかげで、日本にいる間は想像もつかなかった豊潤な世界を発見することができた。広義のユダヤ・スペイン語文学にも多いに関係するのであるが、特に詩と音楽の分野に開眼し、より深い視野でユダヤ研究ができるようになったのではと自負している。

具体的な研究成果としては以下。

学術論文

「メアム・ロエズ研究序説—書名考」『一神教世界』5号(2014年)

「イエメン・ユダヤ詩の作詞技法—ジャワープとその分類」『一神教世界』6号(2015年、近刊)

学会発表

「シャローム・シャバズィーとピユート研究の潮流」京都ユダヤ思想学会夏合宿 2013年9月

「The 'Jawab' in Jewish Yemenite Poetry - its character and technic”, Xth Congress of European Association of Jewish Studies, 2014年7月

「ヘブライ語詩史におけるイエメンの特殊性—ジャワープ詩とその実例」京都ユダヤ思想学会夏合宿 2014年9月

「ラビ・ザーヒリーの作詞技法—ヘブライ語詩のズィヤーダを中心に」日本ユダヤ学会 2014年10月

留学中の生活・研究でのトピックス

きな臭い話だが、留学中の2014年7月から始まった「戦争」は思うところが多かった。エルサレムでは計6回ほど空襲警報を聞き、シェルターに数分避難させられたり、緊急停車したバスから降り、身を屈めつつ迎撃ミサイルがガザからのロケットを空中で迎え撃つ様を眺めたりしていた。妙な話だが、その迎撃ミサイルを発射されるのを見ている時に、イスラエル市民ではない身でありながら「自分たちが払った税金によって国が自分たちを守ってくれている」と実感したことを覚えている。もちろん彼我の圧倒的戦力差による「戦争」だったので、少なくともガザからの攻撃で不測の事態に巻き込まれることはあり得ないと思っており、実際なかったのだが、大学キャンパス近辺の東エルサレムの治安が悪くなる方が問題であった。6月末の入植地で誘拐されたアメリカ系ユダヤ人の若者3人が殺害されていたことが判明した後、東エルサレムのシュアファット地区で暴動が起きたのを機に戦争状態に突入したのであるが、その暴動（アラブ人の火炎瓶に対してイスラエル兵が催涙弾で応戦したと聞いている）が起きたまさにその場所その時間で予定があったのを、情勢不安を理由にキャンセルしたのを覚えている。その後も断続的に生活圏内で公共交通機関を狙った「テロ」が頻発したが、幸い危険を感じることはなかった。

あまり知られていないがイスラエルの物価高、経済難は国防と並んで内政の大きな焦点であり、結果としてネタニヤフの続投が決まった2015年3月の国内総選挙の際も、国防を重視する右派と経済を重視する左派、という構図ができあがっていた。報告者が留学を開始した時期は円高がピーク時で、その後安倍政権の経済政策による極端な円の揺り戻しがあった。最終的に全ての物価が1.5倍以上に跳ね上がった状態で安定してしまい、元々決して安くなかった物価のせいで、留学期間中は常に経済的に苦しんでいた。平均的なレストランで外食して飲み物1杯をつけた場合の値段は、留学当時約1300円程度のものが最終的に2200円ほどになり、とてもではないが全く利用できなくなった。食費は外食を控えればなんとかなるものの、家賃や光熱費といった、ライフラインに関わる努力しようがないものは如何ともし難く、最終的には赤字になってしまった。

今後の社会貢献

ヨーロッパ系以外のユダヤ人は、日本ではいまだ「見えざるユダヤ人」と言っても良い。その中でも中東系ユダヤ人（特にアラブ系ユダヤ人、イラン系ユダヤ人等）は、「敵国」性の烙印を押された存在で、イスラエル建国の際のイデオロギーであるシオニズムは、彼らを人口学的・労働資本の観点から必要としつつ、彼らのその言語や文化を含む「中東性＝後進性・野蛮性」を「ユダヤ人＝イスラエル人」から払拭しようとしてきた。しかしながら歴史的に彼らの文化はまさに彼らの出身地である中東の各文化と全く変わらず、シオニズムが目指し、ヨーロッパ出身のユダヤ人が作った新たな「イスラエル文化」に必ずしも染まらなかった。そのようなユダヤ人のエスニシティ、なかんずく現在政治的に対立状態にあるアラブやイランの文化を「敵国人」と共有する彼らに対しての知見や、彼らの生の声を日本社会に届けることは、イスラエル／パレスチナ研究の枠内に収まらず、中東研究全般に対しても資することができるのではと考えている。機会があれば、学問的な硬質の文体ではなく、数多い中東系ユダヤ人の友人たち一人ひとりの声が聴こえてくるような語り口で彼らの生の声を届けたいと思っている。



共通の友人の結婚式にて。父がイスラエル・ユダヤ人、母がドイツ人の、アラブ音楽奏者（ヴァイオリン）のノルウェー人（ノルウェーは日本と同じく二重国籍を認めていないため、イスラエル市民権は持っていない）の友人（左）、報告者（中）、父がチュニジア系ユダヤ人（イスラエル生まれ）、母がイラン系ユダヤ人（イスラエル生まれ）の、インド古典音楽奏者（バンスーリ=横笛）のイスラエル・ユダヤ人の友人（右）



結婚式と同時期に開催されるヘンナパーティーにて。イエメン系ユダヤ人（イスラエル生まれ）の友人（左）の娘（右）とモロッコ系ユダヤ人（イスラエル生まれ）の新郎（中）。

ヘンナの習慣は中東・インド文化圏出身のユダヤ人の間でも根強い。ヨーロッパ系と中東・インド系のユダヤ人どうしが結婚する場合でも、片方の文化を尊重して行うケースが多い。



「100年に一度の大雪」の翌日の東エルサレム郊外。左手前に見えるのが分離壁（壁の向こう側はパレスチナ自治区であるヨルダン川西岸）。右手前の雪が積もっていない部分がユダの荒野、奥に見えるのがヨルダン山脈でその向こうはヨルダン王国。